

2025年度 学校経営計画及び学校評価【ヴェリタス城星学園高等学校】

1 めざす学校像

城星学園は、カトリックの精神に基づき、創立者聖ヨハネ・ボスコ（ドン・ボスコ）の教育理念である『道理』と『信仰』と『愛』に根ざした教育法によって、園児、児童、生徒の全人間教育に励み、神を敬い、人を愛し、自然を大切にする『良心的な人間、よき社会人』を育成することを使命としています。

「教育は心の問題であり、青少年を愛するだけでは足りません。
青少年が愛されていると感じられるように彼らと共に生きる」

2 中期方針・中期行動計画

1. ドン・ボスコとマリア・マザレロの教育理念を堅持しながら、日々の教育活動の質をさらに高める。
ドン・ボスコとマリア・マザレロの教育を実践するために、聖フランシスコ・サレジオの柔和な精神を自分のものとしていく。
2. 園児・児童・生徒・教職員が” Niente ti turbi.”(「何も恐れることはない」)を実感できるような教育環境を創造する。
専門の先生方の助けを得ながらきめ細やかな生徒対応を行い、生徒の自己肯定感・自尊感情を向上させる。
3. 学園教職員の多岐にわたる研鑽の成果を園児・児童・生徒らの自主的で積極的な学びのために活かす。
姉妹校や他校の見学やオンラインでの研修の機会を増やす。
4. 学園教職員全体が、学園の未来をともに築き支えていくという意識に基づき行動する。
共学化に伴うさまざまなことに気配りをし、学園全体の協力を願う。
5. 保護者・同窓生・姉妹校の教職員・教会関係の人びと・地域社会の人びととの「アシステンツァ」を深める。
教員が良心的な人間、良き社会人としての資質向上に努め、地域との交流を深める。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

ア. 自己評価アンケート結果と分析	イ. 学校関係者評価委員会からの意見
<評価が相対的に高かった10項目> ○施設設備の行き届いた清掃 ○教職員の気持ち良い挨拶 ○「学びの森」の取組 ○緊急時の適切な情報伝達 ○個人情報の適切な取扱い ○地域との連携 ○学校行事の適正性 ○建学の精神・教育理念への共感 ○「学びの森」についての説明の十分性 ○全体的な本校への満足 (満足度79%以上)	学校法人城星学園学校関係者評価委員会は理事会・後援会(保護者)・各学校種管理職・評議員(学識経験者)により構成されている。2025年度学校評価に関する検討は2026年4月11日(土)に行われた。 <意見まとめ> ・保護者の評価が高いことは一定の顧客満足が得られていることを意味していると考えられる。一方で、教職員の満足度が低いのは、自らが謙虚にもう少し頑張らなければならないと感じているからだと思う。

7. 自己評価アンケート結果と分析(続き)	1. 学校関係者評価委員会からの意見(続き)
<評価が相対的に低かった5項目> ○教員間での連携 ○自主的な学習への取組 ○教育理念に基づく生徒指導の実践 ○カウンセリング体制の整備 ○いじめ防止の取組 (満足度49～62%)	・アンケートの中で、いじめ防止の取組みに関する設問のみ、保護者満足度が50%を割り込んでいる。にもかかわらず、教職員の評価はそれよりも高く、学校側では現実に取り組んでいるとの判断がなされていると考えられる。すなわち、教職員の取組みが保護者に届いておらず、この点は学校の課題と思われる。 →生徒同士の微妙な行き違いがいじめ問題に発展するところの初期対応が難しく、教員が対応に追われることがある。保護者も生徒と異なる見方ができなくなってしまうこともあり、生徒と保護者の両方に向き合っていくことに教員は大変苦慮しており、個々の教員の力量を高めると同時に、チーム体制の確立が必要である。また今回のアンケートで相対的に評価が低かった現3年生は、共学化後も女子のみが在籍する学年であり、その対応に特段の留意が必要と認識している。共学化時点で新入生及び保護者に本学園の建学の精神について十分に伝える機会がなかったことを反省している。 →3年生は数の上で圧倒され、縮こまってしまう、あるいは肩ひじを張っていなければつぶされてしまうという感覚があるかもしれない。これまで学校として手厚く接してきたところがあり、今後もそれを求める保護者もいるだろうが、学校の変化の過程の中で保護者自身も理解する必要があるだろう。子どもたちを守るとともに学校を守っていくために、いわれのないクレームを防ぐための指針を定め、学園ホームページに掲載すべきであろう。
<アンケート総括> 【総評】 全体の満足度（「満足」の回答割合）は72.4%と良好な水準に達しており、前年度（72.5%）とほぼ同水準となりました。一定の評価をいただけていることを嬉しく思います。その一方で、全学年総合での満足度が90%を超えた項目がゼロであったことは反省すべき点と捉えています。高34(いじめ防止の取組)が満足度50%を下回っている点についても十分注意してまいります。 【前年度との比較】 本年度の上位10項目に入ったもののうち8項目は前年度も上位10位に入っていたものですが、その中では高23(学びの森)が前年度7位から本年度3位に上昇しています。また高36(地域との連携)は前年度29位から本年度6位に大幅上昇しました。 一方、下位10項目は前年度から大きく変化し、高14(教職員の良識ある言動)は前年度11位から本年度27位へ、高6(教育目標に沿った教育)は同じく14位から29位へ、高17(教員間連携)は同じく12位から32位へ、それぞれ大きく順位を下げ、満足度も大きな下落となりました。日常の再点検を行い、改善へつなげてまいります。 【本校の魅力について】 学校を選ぶうえで重視した点として、これまで圧倒的に多かった「校風」が2位に下がり、代わって「通学時間」が前年度4位からトップに上がりました。また「部活動」は前年度14位から大幅に順位と選択率を上げました。これらの変化には第1学年の選択率が一定の影響を及ぼしているものと考えられます。	・過去のアンケートでは学年が上がるごとに評価が高くなっていたところ、今回は女子のみの学年の評価が下がってしまっている。 ・2026年度は女子のみの学年の最終年度にあたる。引き続き男女共学に理解を求めつつ、最後まで力を尽くしていく他ない。 ・コロナ禍の頃も含め、親子の対話が少なくなっていると感じる。地域との関わりも少なく、友人も少ない中で、異なった意見を言われると傷ついてしまうというケースもみられる。表面的なコミュニケーションしか取られておらず、その状況の中で、成長を促していくことは、我々の大きな課題である。 ・現状、学校評価にかかるアンケートは保護者と教職員を対象として行われているが、高校生徒も加える形で同一項目にて(児童生徒向けの言葉に代えて)実施してはどうか。教職員、保護者、子どもたちの三者でアンケートを実施し分析することは有意義だと思われる。 ・保護者の意見もさることながら、教職員対象のアンケート結果をぜひ重視してほしい。クレームへの対応は必要だと思うものの、学校は教職員も守っていただきたい。ハラスメントのようなクレームに対して学校は毅然と対応すべきであり、むしろ教職員の満足度の向上が、学校活動の充実に結びついてくるのではないかと思う。

【自由記述について】 「我が子をどのように育てたいか」との質問には、保護者各位それぞれの教育方針を示すご回答が多く寄せられました。その延長に本校に対するご要望があるものと捉えられるため、すべての意見に丁寧に目を通しておくことといたします。 また、自由記述欄には本校への感謝を示すお言葉もいただきつつ、共学化による学校の変化に関し、いくつかのご意見も寄せられています。生徒それぞれに寄り添いながら、引き続き丁寧な対応を進めてまいります。	・校舎建設工事も進んできており、改めて安全管理の徹底をお願いしたい。 ・先般他校で事故事案が発生していることもあり、校外学習の安全実施に努めてほしい。 →事件や事故に巻き込まれないか、という不安は常に持っている。一方で何もさせないというわけにはいかないので、本人・保護者の同意のもとにサポート体制を十全にしたうえで、希望者のみを募って実施する形をとっている。今の子どもたちは体力に不安があるケースもあり、特に注意が必要だと認識している。 ・学校として教員を守る必要がある。教員による教育が充実しなければ学校の発展はないし、子どもを通わせる意味がない。教員をしっかりと守る仕組みを作って教育を充実させていくことが学校のより良い評価につながっていき、生徒数の増加に結びついてくるだろう。 →いじめの直接対応にあたる教員は特に大変であるが、誰が担当したとしても当該問題は発生してしまうものであるから、学校は教員を守っていくことを全教員に伝えている。 ・過度のクレーム等に関してはスクールロイヤーの活用なども想定すべきである一方、学校で対応できる範囲を明らかにしておくことも必要であろう。 →顧問弁護士には常日頃大変お世話になっている。いじめの定義が法的に定められて以降、学校の教育活動の範囲内での問題解決を図っていくのではなく、弁護士に依頼して対応していることが増えている。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

※ 満足度は学校評価アンケートで「5:とても満足」「4:まあ満足」の回答割合を示している。

※ 「年度評価」の記載内容は学校評価アンケートの結果を分析したうえで、当該目標にかかる活動全般を評価したものである。満足度80%以上で○、同55%以上で△、それ未満で×の表記としている。

中期的目標	中期行動計画	年度行動目標	ねらい	関連する学校評価アンケート項目及び満足度	年度評価
1. ドン・ボスコとマリア・マザレロの教育理念を堅持しながら、日々の教育活動の質をさらに高める。	ドン・ボスコとマリア・マザレロの教育理念を実践するために、聖フランシスコ・サレジオの柔和な精神を自分のものとしていく。	ドン・ボスコとマリア・マザレロのように、生徒が主語となるような教育に前向きに取り組む。	生徒の主体的な行動	子どもは、自主的な学習に取り組んでいる。 (満足度61.0%)	△生徒が主体的に行事などに取り組むためには、生徒を信頼し、任せることが必要であるため、教員のさらなる意識改革が重要である。
		全ての人を尊敬し、受け入れた聖フランシスコ・サレジオの柔和な心で生徒と関わる。	さまざまな感情の自律、全ての人の受容	学校は、建学の精神および教育理念に沿った教育を行っている。 (満足度65.4%)	△アンケート結果は振るわなかったが、様々な課題を抱える生徒の特性や背景を理解し、アシステンツァの心で一人ひとりに寄り添ったサポートを継続できた。また、受容と愛を基盤に、生徒が安心して学校生活を送れる環境づくりに努めた。
				教職員は、社会人としての良識ある言動を実践している。 (満足度66.3%)	
2. 園児・児童・生徒・教職員が”Niente ti turbi.”(「何も恐れることはない」)を実感できるような教育環境を創造する。	専門の先生方の助けを得ながらきめ細やかな生徒対応を行い、生徒の自己肯定感・自尊感情を向上させる。	ドンボスコ未来センターとの連携を深め、生徒対応のスキルを向上させる。	生徒の成長への同伴	学校は、教育目標(アシステンツァ・ファッチョイオ)に沿った教育を行っている。 (満足度64.1%)	△生徒サポートの充実に向けスクールカウンセラーとの連携を図ったが、対応が学年任せになる場面もあった。今後は専門スタッフとの連携強化、生徒対応のスキルを向上させることが課題である。
		さまざまなジャンルの専門家による研修を企画し、教員の視野を広げる。	主体的・積極的な研修参加、教育使命のなかでの実践	教員は、子どものさまざまな状況に日々寄り添うよう努めている。 (満足度72.3%)	△研修への参加を通して学ぶ機会はあったが、実践にまな状況に日々寄り添うよう努めている。 (満足度72.3%)
		さまざまな講習を通して、生徒自身の危機管理能力を向上させる。	生徒の学園における上級生としての意識向上、児童や園児の見守り実践	学校は、基本的生活習慣・礼儀・マナーについて指導している。 (満足度74.1%)	△避難訓練や自転車安全指導を継続し、安全意識を高めることができたがさらなる向上が必要である。現在、道路交通法改正を踏まえて、今後の指導の充実を検討している。
				学校の施設・設備は、安全管理が行き届いている。 (満足度78.0%)	

中期的 目標	中期行動計画	年度行動目標	ねらい	関連する学校評価アンケート項目及び満足度	年度評価
3. 学園教職員の多岐にわたる研鑽の成果を園児・児童・生徒らの自主的で積極的な学びのために活かす。	姉妹校や他校の見学やオンラインでの研修の機会を増やす。	共学校スタートの年にあたり、各教員が積極的な自己研鑽に努める。	生徒が主体となる授業実践、生徒指導のスキル向上	学校は、子どもにとって将来につながる「探究的な学び」を行っている。 (満足度72.0%)	△「教え込み型」授業からの脱却を目指し研修を実施したが、授業改善は十分とはいえない。今後も研修と実践を重ね、生徒主体の授業づくりを進めていくことが課題である。
		学園内での研究授業の機会を増やし、公開授業を実施する。	他者評価を受け止めての授業力向上	学校は、教育内容の公開(授業参観等)に努めている。 (満足度73.4%)	△公開授業研究会を実施し、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業づくりについて学ぶ機会を設けた。来年度は授業研究の機会を複数回設定し、継続的な授業改善が必要である。
4. 学園教職員全体が、学園の未来をともに築き支えていくという意識に基づき行動する。	共学化に伴うさまざまなことに気配りをし、学園全体の協力を願う。	共学化を成功させるため、教職員が希望を持って、主体的に動き、互いの豊かさを引き出していく。	共学化の成功	教員間での連携が図られている。 (満足度61.1%)	△様々な課題に対応しながら共学化への移行は概ね円滑に進んだ。来年度は生徒数増加も見据え、意識改革と受け入れ体制の整備を進めていくことが課題である。
		新校舎建築にあたり、他校種と積極的にコミュニケーションをとり、必要な協力を惜しまない。	校種を超えた教師間の交流の場の増加	—	△校種を超えた交流を進めることを目指したが、行事等の重なりなどにより十分な機会を確保できなかった。今後は継続的な交流の機会づくりが課題である。
5. 保護者・同窓生・姉妹校の教職員・教会関係の人びと・地域社会の人びととの「アシステンツァ」を深める。	教員が良心的な人間、良き社会人としての資質向上に努め、地域との交流を深める。	後援会や同窓会の協力に感謝し、教育活動面での具体的な協働の可能性を模索し、実行していく。	後援会や同窓会との交流の積極的深化	学校の行事(内容・頻度)は適正である。 (満足度80.5%)	○サマーフェスティバル等につき、もちつき大会にも生徒会を中心に協力し、後援会等との交流を深めた。今後は連携を大切にし、主体的な参加を継続していく。
		教会のイベントなどに生徒の積極的な参加を促す。	生徒のボランティア精神の養成、自ら考えて行動する力の習得	子どもは、自主的な学習に取り組んでいる。 (満足度61.0%)	△募金やボランティア活動への参加は広がりつつあるが、全体への定着には課題が残った。今後も取組を継続し、ボランティア精神の醸成を図っていく必要がある。
		地域のイベントに関心を持ち、地域社会との交流を深め、開かれた学園を目指す。	地域の人々との交流深化	学校は、地域との連携を図っている。 (満足度80.6%)	○施設開放を実現することができた。ただ、地域との交流を十分に深めるまでには至らず、本学園からの積極的な発信も課題として残った。今後は地域の要望に応えるだけでなく、本学園からも交流の機会を提案し、連携を進めていく必要がある。